

## 国際福祉実習施設「聖隷希望の家」職業訓練センター 竣工式に参加して

横尾 恵美子\* 太田 雅子\*\* 中村 憲司\*\*\*

\*介護福祉学科

\*\*こども教育福祉学科

\*\*\*総務部

The opening ceremony of new vocational training  
centers at “Seirei Acha Bhavan”, an institution  
for the International Social Work Practice

## I. はじめに

聖隷学園は南インドにある知的障害者施設「聖隷希望の家」とはグループ法人であり、聖隷希望の家を運営しているアブラハムさんは、この施設を立ち上げる前に日本に勉強に来て半年、長谷川保先生から指導を受け、聖隷福祉事業団をはじめとする聖隷グループの施設で研修した人である。本校の社会福祉学部は国際福祉実習施設として「聖隷希望の家」での実習を行っている。

2013年8月23日に開かれる職業訓練センターの竣工式にアブラハムさんからの招待を受け聖隷学園から私たち3名が施設訪問をした。以下その報告を行う。

## II. 南インドの概要

インドは南アジア随一の面積を有し、328万7,263平方キロメートル（インド政府資料：パキスタン、中国との係争地を含む）である。首都はデリー、人口は12億1,000万人（2011年国勢調査）と世界第二位の人口を誇る大国で、アーリヤ族、ドラビダ族、モンゴロイド族等多様な民族で構成されている。公用語はヒンディー語であるが、憲法で21言語が公認されている。宗教はヒन्दゥー教が80%、次いでイスラム教徒、キリスト教徒、シク教徒、仏教徒いうように多くの宗教がある。この様に多民族、多言語、多宗教の国である。識字率は74%（2011年国勢調査）である。（図1）

ヒन्दゥーが最も多いために、カースト制度の影響は今も残っている。人口の7割が1か月1万円以下の収入で暮らしており、極度の貧困生活を強いられている人々の層も多い国でもある。



図1 訪問先の地図

今回訪問した「聖隷希望の家」のある南インドの主要な産業は農業であり、インドの全土のIT産業の7割がこの地で占めている。自動車産業も盛んであり、インド全土で生産される自動車、バス、大型トラック、列車、自動二輪の50%も南インドで生産されている。またこの地域の教育水準は全体的に高く、特に今回訪問した施設のあるケララ州は識字率98%を誇り、失業率もインド全土の中で最低である。都会ではないが豊かで安定した州といえる。（図2、図3、図4）



図2 街並み



図3 街並み



図4 街並み

聖隷希望の家（VALACODE PUNALUR - 691331 KERALA INDIA）までは、トリバン  
ドラム空港から車で2時間半位かかる。道は舗  
装されているが、車道以外は土がむき出しの  
ところが多く、砂埃がひどい。信号機がほとん  
どなく、警察が誘導をしているところもあるが、  
特に何も指示がないので、みな勝手に運転して  
いるという感じである。時速80キロで街中（人  
が歩く道）を走ることもある。追い抜きや車線  
のはみ出しは当たり前で、クラクションを鳴ら  
しながら走るので、その騒音と急加速や急停  
止の繰り返しで車酔いしそうな運転が続いた。  
舗装された道が途切れてしばらくして、SEIREI  
ASHA BHAVAN「聖隷希望の家」の看板が見  
えてきた。（図5）



図5 聖隷希望の家の看板

その角を右に曲がると、アブラハムさんの自  
宅と施設（school for the Mentally challenged  
知的障害者の学校）があった。

### Ⅲ. 聖隷希望の家

#### 1. 聖隷希望の家の施設について

インド聖隷希望の家はアブラハムさんによっ  
て1989年に開設された知的障害児者のための  
施設である。現在は4歳から58歳までの約70  
の方が利用している。インドでは日本の介護  
保険法や障害者総合支援法などの高齢者や障  
がい者の為の福祉政策は整備されていない。その  
為はこの施設の運営資金は団体や個人からの寄  
付やチャリティー、キリスト教教会の支援、利  
用者の家族からの寄付、ゴムや糸などの商品の  
売上金が主な財源であり、全く公的な補助はな  
いということである。

「聖隷希望の家」には5つの建物がある。一  
番奥は講堂がある棟、一番手前がアブラハムさ  
んの自宅兼国際福祉実習時の宿泊室、講堂と自  
宅の間に細長い入所者の居室などの棟がある。  
それと以前はアブラハムさん家族が住んでいた  
という小さな建物があり、今は糸をつむぐ作業  
室になっていた。（図6）そして、新たに建て  
られた職業訓練センターである。



図6 奥が講堂 右側の建物が居住棟



図7 入所者の居室



図8 入所者の居室

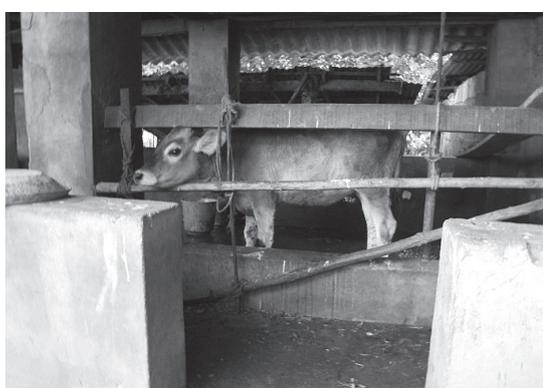


図9 聖隷クリストファー中・高から寄贈された牛から生まれた子牛

講堂は教育や就労支援、余暇活動、食事等の場として多目的に使用されている広い板張りの部屋である。テーブルや椅子はその都度出したり、横に寄せたりしながら使用している。利用者の居室はベッドが6つある男性の部屋が2部屋あり、少し離れたところに女性用の部屋が2部屋あり、その奥に住み込みの女性スタッフの部屋がある。(図7、図8)

日本の入所施設の居室のイメージと全く異なり、部屋にベッドが並べてあるだけの空間で生活をしている。住み込みの職員の部屋は入所者の部屋より少しだけスペースが広いが相部屋であり、利用者と部屋の作りは一緒であった。後で他の施設も視察に行ったが、この地域ではこの状態が普通であり、まだ恵まれているほうだと分かった。

料理は土間と外の水場で行っており、聖隷クリストファー中・高等学校からの寄贈された牛も大きくなり、子牛も育っていた。ウサギ、イヌも飼われていた。(図9)

入所者の方が住んでいる部屋は、築150年が過ぎて老朽が進み、何度も修理を繰り返しながら使用してきたが、雨漏りもし、倒壊の危険性があるために行政より、増改築は禁止され、使用もしないようにとの指導が繰り返されていたという。

今回建てられた2階建ての建物には1階が職業訓練室とスタッフの部屋があり2階は入所者の居室となっている。増築が出来るような作りをしているということだった。歩行が不自由な方が利用しやすいように、2階にはスロープでも行けるようになっていた。



図 10 職業訓練センター



図 11 新しい居室



図 12 糸をつむぐ作業室



図 13 庭のゴムの木

この建物を建てるために、行政の補助を申請していたが認可されず、アブラハムさんの妻であるシーラさんの実家から資金を出してもらい建築にこぎつけた。そのため建築費を少しでも安くするために、施設の利用者と職員で外壁の塗装をするなど、みんなで作り上げたという。入所者の居室も明るくきれいで入所者の方が本当にうれしそうに部屋を見ていたのが印象的であった。(図 10、図 11)

## 2. 利用者の生活について

### 1) 就労支援

施設の別棟には糸をつむぐ機械があり、職員の方と入所者が一緒に糸をつむいでいた。体験をさせていただいたが、難しくすぐ糸を切ってしまった。(図 12)

庭にはゴムの木があり、ゴムも運営の足しになっているということであった。(図 13)

### 2) 食事

土間と中庭で入所者の食事を作っていた。中庭で魚などを洗いながら下処理をし、土間では材料を切る等、分担して作業を行っていた。(図 14、図 15)

昭和 20 年代の日本の台所のような感じであった。しかし、薪とガスに交じって電磁調理器があるのに驚かされた。IT の進んだインドだということを実感させられた。

食事は思っていたよりも豪華であった。アブラハムさん妻のシーラさんが作ってくれる料理とほぼ同じメニューで、ここでも利用者を家族と考えるアブラハムさんの姿勢を感じる事が

できた。入所者の方は、知的障がいがあるにもかかわらず、静かに食事が運ばれるのを待ち、お代りわりも自由で家庭的な雰囲気を感じる食事風景であった。(図16)



図14 中庭で魚をさばいている様子



図15 土間で料理をしている様子



図16 食事風景

### 3) 到着時の歓迎の様子とセレモニーの準備

到着すると入所者と職員の方たちが講堂までの通路に座って拍手や歌で歓迎をしてくれた。

入所者はみな笑顔で、握手を求めたり写真と一緒に写りたいとそばから離れなかったりと、本当に私の訪問を喜んでくれているのが伝わった。(図17、図18)

利用者の方は知的障害があり、情動行動があり一人になったほうが落ち着く人もいたが、職員は利用者の行動を強制せず、障害があり多動な人には寄り添うようにそっと職員が傍で見守っていた。職員の方たちは大変優しく入所者の方に接し、入所者との関係も大変良いことが伝わった。



図17 到着時の歓迎セレモニー



図18 男性の少し年齢の高い利用者と一緒に

この施設は12人のスタッフがいる。1人はアブラハムさんで管理者兼 social worker、driver、という、5人が special teacher で彼らは専門教育を受けている。養成には1年コースと2年コースがあり、昔は1年コースが主流だったが、今は2年コースが主になっていること。2名の料理担当職員、3名の care taker という内容であった。(図19)

施設には自分で食べることのできない人が7人、何らかの介助が必要な人が10人いるという。それ以外の人は要支援や見守りであるが、地域生活や在宅では生活を継続することができない人たちだという。

施設の入所者と職員の関係は大変良いように思えた。何よりも入所者が大変明るく、幸せそうであった。職員の対応も暖かさを感じた。

利用者やアブラハムさんをはじめ職員の方たちは、8月22日に行われるセレモニーの準備に明け暮れていた。利用者の方は当日披露する歌やダンスの練習を終日行っていた。広い行動で歌ったり、踊ったりをしていた。(図20)

### 3. アブラハムさんの自宅（国際福祉実習の宿泊場所）

アブラハムさんの自宅は2階建てである。玄関先にはメモリアル碑があり(図21)、玄関を入ると長谷川保先生と八重子先生の絵が飾られている。(図22)

2階は普段は家族が使っているようだが、本校の学生が実習に行くときにはそこが学生の部屋になるようだ。(図23) 私もそこに宿泊させていただいた。クーラーもあり、シャワーや水洗トイレもあり、何ら不自由は感じなかった。しかし、送電が不安定なようで、毎日、短時間ではあるが停電があった。



図19 職員の皆さんと一緒に



図20 歌の練習をしている場面



図21 メモリアル碑



図22 2階にある長谷川夫妻の絵



図 23 学生が泊まる部屋

#### IV. 新しい建物の竣工式

利用者の生活の様子が見えるセレモニーのパンフレットや施設の門の前に横断幕が飾られ、竣工式の準備が前日の夜遅くまで行われた。(図 24、図 25)



図 24 セレモニーのチラシ



図 25 横断幕の奥がアブラハムさんの自宅

8月22日10時30分より、「インド聖隷希望の家」の職業訓練センターの献堂式がマトマ教会（聖トマス教会）の司祭によって行われ（図 26）聖隷学園から参加をした私たち3名がテープカットをした。（図 27）

来賓にはケーララ州の議員や市長、市会議員等が名を連ね、それ以外にも地域の方や利用者の家族、福祉関係者等、300人程の参加者で講堂に入りきれないほどであった。

玄関の右壁一面に「よきサマリア人」の絵が掲げられている。これは、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」という聖書の言葉と合わせて、隣人愛の実践を続けて行くことを伝えるために飾っているのだという。

連日練習を重ねた利用者の歌やダンスも披露された。（図 28）



図 26 聖トマス教会の司教による式典



図 27 テープカットの様子



図 28 利用者が披露したダンスの様子



図 32 左がシーラさん、右がアブラハムさん

議員や市長に加え私たち聖隷学園からの参加者も来賓としてスピーチを行った。(図 29～31)

いろいろな人のスピーチや利用者家族の話から、多くの方たちの支援を受けてこの施設の運営がなされていることが分かった。

滞在の記念としてインドの民族衣装を着てアブラハムさん、シーラさんと記念写真を撮り(図 32)、式典の後にもみんなと一緒に何枚もの記念写真を撮った。(図 33)

帰国後、何度も思い出すのは、入所者の方と教職員の方の幸せそうな笑顔と笑い声ある。福



図 29～31 3人のスピーチの様子



図 33 新しい建物の前で記念写真

祉制度が整っていない中での、ぎりぎりの運営の中でも利用者の方は本当に幸せそうであった。アブラハムさんをはじめとした職員や地域の人たちから、暖かい愛情を受けながら日々暮らしていることを実感させてくれるものだった。アブラハムさんは実践することの大切さを「Love is Action」という言葉で何度も話されていた。

これからも、インド聖隷希望の家への支援をより強めていきたいという思いを強くした視察だった。